

アワーミュージアム

第 11 号 1999年10月10日発行



上方に運ばれた大谷焼

石尾 和仁

これまで近世史(江戸時代史)の研究といえ
ば,その豊富な文献史料を読み解くことと相場
が決まっていた.しかし,近年,再開発にとも
なって近世を対象とした埋蔵文化財の発掘調査
が急増している.かつては,文献史料の乏しい
古墳時代以前が考古学の学問的対象であったこ
とを考えると隔世の感である.

そのきっかけとなったのは,もちろん東京都
の江戸遺跡であるが,徳島県でも1990年代に
なると,新蔵町界隈や常三島を中心に近世遺跡
の調査件数の増加は著しい.こうした調査で明
らかになりつつある近世史像は広範な物資の流
通の実態を提示してくれている.地元徳島の
大谷焼の出土はその例である.



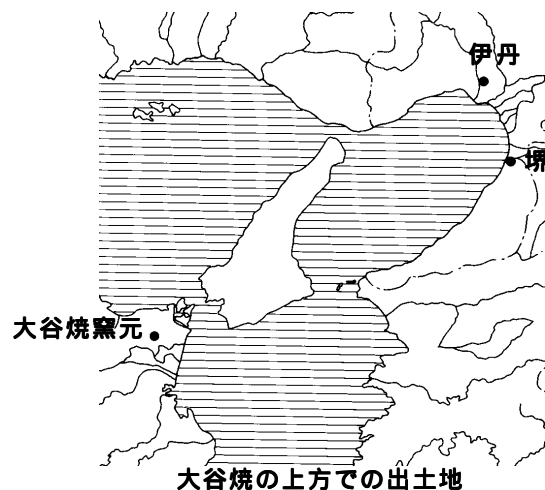
大谷焼の出土状況

大谷焼の研究は,かまもと のうだ
『陶器由来書』を分析された故豊田進氏
によってすすめられているが,それによると,18
世紀後半に磁器生産を始めた藩窯が廃窯になっ
た後,藍商笠井惣左衛門の尽力で信楽焼の陶工
忠蔵を招いて天明4年(1784)に民窯として陶
器生産を開始するという.鉄釉を施した陶器甕

びん すりばち
や瓶・播鉢等を主に生産していたが,この大谷
焼が近年発掘調査の増加している徳島城下町の
各遺跡はもちろんのこと,関西方面でも出土す
ることが報告されている.兵庫県伊丹市の伊丹
郷町遺跡や大阪府堺市内の町屋跡では19世紀
初頭以降大谷焼の甕が便槽に使用される頻度
が高まるようである.こうした出土事例が示すよ
うに,少なからず大谷焼が大阪湾を渡って流通
していたことが知られるのである.伊丹郷町の
調査に従事された富山大学の前川要氏は,伊丹
の酒運の搬帰り荷として大谷焼が消費されると
いう,大阪湾をめぐる近世後期型流通機構がこ
の時期成立してくるのではないかと述べてい
る.こうした事実は考古学の方面から大谷焼の
歴史に迫っていける1つの材料になろう.

このように,流通する陶磁器群から近世徳島
をめぐる流通の実態がうかがえるのであり,こ
れまでの農村史を主流とした近世史研究の枠組
みを大きく変える可能性を「近世考古学」は
持っている.近世史研究にとって大変魅力的な
材料を提供してくれているのであり,一人でも
多くの方が「近世考古学」に関心を持っていた
だけることを願わずにはいられない.

(いしお かずひと:友の会会員)



大谷焼の上方での出土地

モズのハヤニエ

行成 正昭

スズメ目モズ科のモズ *Lanius bucephalus* は、捕らえた獲物を満腹時には木の枝や刺、有刺鉄線などに串ざしにしたり、挟んだままにして食わずに行ってしまうといった、この仲間特有の行動をする。秋から冬にかけて、開けた畑や公園、庭などモズの生息している地域には普通に見られ、モズのハヤニエ（早贅）と呼ばれている。このモズのハヤニエに関しては、唐沢孝一氏が観察、実験記録を詳細に紹介しており、大変興味深い。この中には、今までに明らかにされているハヤニエの動物リストが報告されており、ほ乳類、鳥類、は虫類、両生類、魚類、昆虫類の種名が多数掲載されている（モズの話、北隆館，1980）。

筆者は1995年11月に2回、徳島県名西郡石井町で、本県特産の果樹、香酸カンキツの仲間であるスダチの木の刺にハヤニエとなったアカエグリバ *Oraesia excavata* Butler（ヤガ科）の成虫を1個体ずつ観察した。この場所より直線距離にして、南に約200m位の所には東西に山が連なっている。そこからスダチの木の周辺に植栽されている温州ミカンの果実を吸汁しに夜間飛来し、モズに襲われたのだろう。また、1996年3月には、徳島市川内町下別宮の、サツマイモ畑に囲まれた雑木林に植わっている、ヤマナシ（現在の重要な果樹であるナシはこのヤマナシから改良された）の刺にさされた子ガメ（クサガメ）のハヤニエを観察した。サツマイモ畑の間には小川が流れているので、そこで捕らえられたものと推察される。

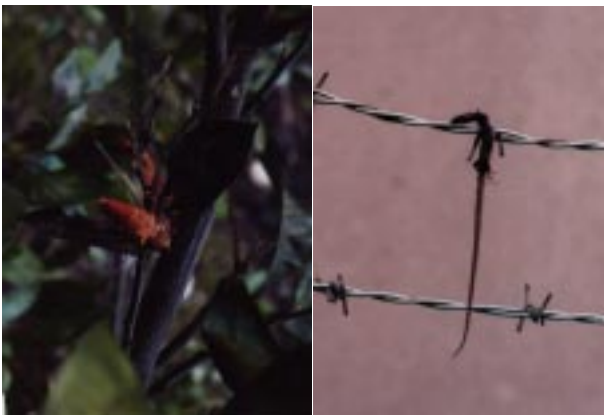


図1

図1：温州ミカンの枯枝に刺されたアゲビコノ八成虫（1997年11月）

図2

図2：有刺鉄線に刺されたカナヘビ（1998年11月）



図3：ナンテンの二又になった枝に挟み込まれたアマガエル（1998年12月）

ところで、唐沢氏の動物リストの中にアカエグリバの幼虫は掲げられているが、成虫は記録されていない。また、カメの記録もない。これらは極めて珍しい例と思われる。

次に、我が家の庭でのモズのハヤニエの観察例を紹介しておく。このモズは1997年11月～12月の間にアマガエルばかりモモの枝に3個体、ウメの枝に2個体、カリンの枝に1個体、サンシュユ（別名ハルコガネバナ、アキサンゴ）の枝に2個体、ナンテン（二又になった枝に挟み込んでいた）に1個体をハヤニエにした。この庭の樹上にはアマガエルがよく見られることは確かである。この例のようにモズのハヤニエは、その環境の動物相をある程度反映していることが分かる。

ハヤニエをたてる植物も様々で、刺し易い突起物があれば、手当たり次第に利用するようである。徳島県三好郡池田町新山にタラノキ（ウコギ科）がおよそ10aに1,000本植栽されている圃場があるが、先端の頂芽に鱗翅目の幼虫のハヤニエが認められた。そこで翌日の1998年1月8日に、この圃場内を歩いて観察したところ、鱗翅目の幼虫の個体（毛虫：4、イモムシ状のもの：5、ひからびていて種名を特定することはできなかった）、ベニモンツノカメムシ、アマガエル各1個体のハヤニエが見つかった。タラノキにハヤニエをたてる例は今まで報告されていないが、今回の観察例からタラノキはモズがハヤニエをたてるのに利用し易いのかも知れない。

秋から冬にかけて、調査区を決め、ハヤニエを探し、発見したハヤニエが、その後どのように消失していくのか調べてみるのも興味深い。また、モズは生態系内の食物連鎖の上位に位置するので、ハヤニエによって、モズの捕らえた獲物を確認することで、その地区の食物網を作成したり、動物相を明らかにすることができるかも知れない。その気になれば、自然からの情報を引き出せるテーマは身近な所からでもある。（ゆきなり まさあき：友の会会員）

博物館紹介 10

阿波和紙伝統産業会館

瀬尾 哲英

先日、久しぶりに麻植郡山川町にある阿波和紙伝統産業会館(以下和紙会館)へ足を運びました。これまでと変わりなく、阿波和紙産業会館という言葉にふさわしい「蔵」をイメージした近代的な建物が迎えてくれます。この会館へは車で来るのが一番ですが、JR四国を利用するときはJR徳島本線阿波山川駅で下車し、南(ふいご温泉方面)へ徒歩で15分ほどです。



阿波和紙伝統産業会館全景

駐車場に車を止め、会館へ入ると、ガラス越しに紙漉きの作業所が目飛び込んで来ます。ついつい見とれてしまい、入館の手続きを忘れてしまいそうになります。入館の手続きをすましたら、まず2階へ。

2階に上がると麻植郡における和紙の由来や和紙づくりの作業工程を紹介したビデオが映し出されています。初めて来館された方は、まずこのビデオを見てから館内を見学するとよいでしょう。2階にはギャラリーや多目的ホールがあります。ギャラリーでは、デザイナーやアーティストによる創作展や古いものから新しいものまで和紙作品のテーマコレクション展などを常時開催しています。私が訪れたときは、「池田毅、二十四節気考」展が開催されていました。多目的ホールには、紙に関する書籍・文献・資料等が収集保管され、閲覧できます。また、視聴覚設備を有し、講演会、講習会などが催されます。しかし、一番の目玉は、1階の紙漉きの作業所が2階まで吹き抜けになっており、先程見たビデオの作業工程や紙漉きの作業をしている職人さんたちの様子を2階からつぶさに見学できることです。

つぎに、1階の小展示室(ミュージアムショップ)に足を運んでみましょう。この和紙会館でつくられたさまざまな種類の和紙やそれらを使って作られた文具やインテリアなどの日常品が展示販売されています。本当にいろいろなものがあり、ここを見るだけでも来た価値があるかもしれません。藤森館長の言われている「現代の生活空間に、新鮮な感性をとどける和紙づくりに私たちは思いをこめています」(ホームページより)という言葉が実感されるかもしれません。

和紙会館は、見学するだけでなく実際に「紙漉き体験(原料の処理、紙漉き、乾燥、仕上げまでの阿波和紙の製造工程を見学し、手漉き・染め・刷りの体験学習)」ができます。本格的に紙漉きをやって見たい人は、「阿波手漉和紙研修会」に参加されるといいでしょう。さらに、和紙を使ったワークショップ(ちぎり絵、和紙人形、藍染・草木染など)も開催されています。また、これまでに国内外から多くのアーティストやデザイナーが訪れ、作品を制作しているとのことでした。



紙漉きの体験学習

この和紙会館に来て、忘れかけている和紙のもつ魅力に触れてみてはいかがでしょうか。最後になりましたが、和紙会館がホームページを開設していますので興味のある方はどうぞ。

URL : <http://www.emile.co.jp/awagami/>
(せお てつひで: 友の会会員)

阿波和紙伝統産業会館

休館日: 毎週月曜日(休日の場合は火曜日)

開館時間: 午前9時~午後5時

入館料: 一般300円(240円)/学生200円
(160円)/小・中学生150円(120円)
()内は20名以上の団体料金

[問い合わせ先]

財団法人 阿波和紙伝統産業会館

〒779-3401 徳島県麻植郡山川町字川東141

TEL.0883-42-6120 FAX.0883-42-6085



会員の武市泰典君は、この夏おじいさんの家の納屋に棲みついているムササビの観察を行ったそうです。その様子を作文とインタビューで紹介します。



ムササビの巣箱をつけた武市君

ムササビの観察

武市 泰典（中学1年）

セミの声が聞こえなくなると、キリギリスなどが鳴き始めてから、グルルと言うようなうなり声をする。しばらく鳴き声がした所を見るとのき下から二つの目がキラキラ光る。その二つの目はしばらくすると体全体をそとに出してのき下を走ってイチョウの木に飛ぶ。その後ヒマラヤスギにかけ上がって大かっくうをする。その後なん度かかっ空をしてえさのある森にすがたを消す。

ぼくがムササビに興味をもったのは祖父の家の一角でムササビが住み始めたからだ。今は親子で住んでいて、一ぴきが親で一ぴきがオスの子どもであることがわかった。夜中にイロハモミジの木にとまってえだをかじったりする様子も写真にとれた。

観察していてカメラのフラッシュで目がくらんで目の前を走っていったり、ぼくのかたにのったりとてもびっくりした。また、巣の前でザワザワすると、出てこなかったりときどき巣を代えられたりしてかんさつの難しさにも気が付いた。

秋にかけては、はん殖期なので子育ての様子を観察したらおもしろいと思う。

（たけいち やすのり：友の会会員）

.....

ムササビの観察をした武市君にお話しをうかがいました。

- 観察した場所はどこですか。

武市君：徳島市の一宮町、大日寺の近くです。

- いつ頃から棲みついているのでしょうか。

武市君：はっきりとはわかりませんが、10年くらい前からだと思います。

- 見たときどんな印象を持ちましたか。

武市君：かわいいけれど、目がキラキラしていて気味が悪いときもあります。尾は体と同じくらいの長さがあります。ふさふさとしていてタヌキの尾のようです。でも、そんなムササビを観察するのは楽しいです。

- どんな方法で観察したのですか。

武市君：最初は巣箱で観察できないかと思って、作り方を「佐那河内いきものふれあいの里」に行って教えてもらいました。外の面はざらざらしていた方がいいとか、出入口の穴を直径10cm ぐらいにするとかです。8月の初めに巣箱はつけましたが、結局そこには入りませんでした。それで、観察は棲みついている納屋の中と外から、そして木の下から行いました。木の下に新聞紙を広げておいて、オシッコの観察もしました。茶色のシミが4～5回付いていたことがありました。それから「いきものふれあいの里」の職員さんに赤外線ビデオを借りて、納屋の外から出入りの様子を9時間ほど録画しました。ムササビは夕方の6～7時頃出てきて、あと夜中の12時、3時頃にも出入りがありました。

- 観察期間はどれくらいですか。

武市君：8月の間で、毎日ではありませんが約1ヶ月です。

- 観察の時間帯を教えてください。

武市君：夜の7時くらいから12時頃までですが、3時くらいまで観察したこともあります。

- 何を食べているのでしょうか。

武市君：かじった残りものから考えると、青い柿の実や、クリやモミジの種を食べているようです。

- 観察していて、印象に残ったことはありましたか。

武市君：一度，僕が木の下でいた時，移動する経路のじゃまになったのか，後ろから肩にとまられたことがありました。びっくりしましたが感動しました。それから，正面から写真を撮った時，フラッシュに目がくらんだのか，木から落ちてきたことがありました。

- ムササビは2匹で親子とのことですが。

武市君：体の大きさは同じくらいですが，色が黒っぽいのが子どもで，白っぽいのが親です。親子で歩き方もちがっていて，親ははねるように歩きますが，子どもは横にずれるように歩きます。飛ぶのも親が上手です。親は地上からの高さの2倍くらい飛びますが，子どもは地上からの高さと同じくらいしか飛ばません。

- 今後，どんな観察をしたいと思えますか。

武市君：繁殖について観察したいと思っています。

- 頑張ってください。今日はありがとうございました。



納屋のムササビ



イロハモミジの木にとまるムササビ

友の会活動いろいろ

個人会員の吉成宏さんはときどき来館されるだけでなく，友の会事務局へ手紙も書いてくれます。今日はお便りの内容と吉成さんの日頃の活動について紹介します。



吉成さん（1998年秋の研修会にて）

吉成さんは板野町在住で，博物館友の会設立当初からの会員さんです。特に岩石，生物など自然分野に興味を持っています。この夏のお便りでは，家の近くのメダカやホタルの生息状況について知らせてくれました。地元の板野町や藍住町を流れる河川の周辺を観察されています。お便りとともに，地図のコピーにメダカやホタル，ヒメタニシの棲息地域の報告もいただきました。

また吉成さんはメダカを自宅でも飼われており，何度も産卵・孵化に成功されています。ふえたメダカは小学校やお知り合いの方など，希望者に配ったこともあるそうです。他にも，もと木工職人だった手先の器用さを生かして，鋳物を研磨して自作の額縁に入れて飾りにしたり，昆虫箱を作ったりもしています。この昆虫箱を作るときは博物館のドイツ箱のサイズを熱心に計って帰られました。

それでは，吉成さんが作られた俳句をご紹介します。

父母の 遠く亡くなり 蛍飛ぶ

蛍飛ぶ 燃ゆるところを 押さえては

（よしなり ひろし：友の会会員）

皆さんも，日々の生活の中で気づかれること，思うことなどありましたら，友の会事務局へご意見をお寄せください。随時，取り上げていきたいと思えます。

わが町・わが家の宝物

亥の子

森本 嘉訓

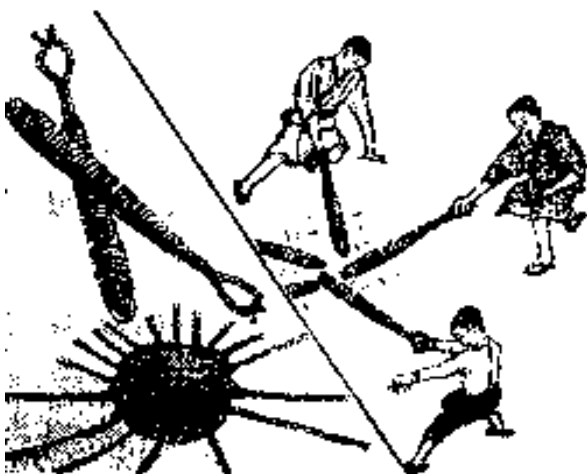
「亥の子」とは、旧暦十月亥の日に行われる、稲の刈り上げを祝う行事である。この日に、亥の子餅をこしらえて食べたり、神に供えたりする習慣が、西日本一帯に広く分布している。またこの日は子供達が縄付きの石や、藁ボテで、各家々の庭先を搗き、餅などをもらう光景がみられた。

亥の子の行事は、県下一円で行われていたが、農業の機械化が進み、ほとんど見なくなった。また、亥の子の餅もらいも、教育的な観点から禁止された地域もあって、今はその光景は見られなくなった。

この亥の子の行事は、もともと中国の俗信に起因するもので、日本に渡来してからは平安時代に宮廷で行われ、中世には武家、やがて商家も含めて民間で広く行われるようになった。つまり千年以上も続けられてきた伝統的行事である。

私たちが日頃接する民俗には、事の始まりや発展の過程が不明な場合が多い。古い記録に出てこないからである。しかし今私たちは、目の前に消えかかろうとしているさまざまな風俗習慣を目のあたりにしているのである。しっかりと見て後世に伝えたいと思う。

(もりもと よしのり：友の会幹事)



亥の子つき

『由岐の民俗』より
(船越要氏画)



「亥の子」のお供えもの

友の会の行事の記録

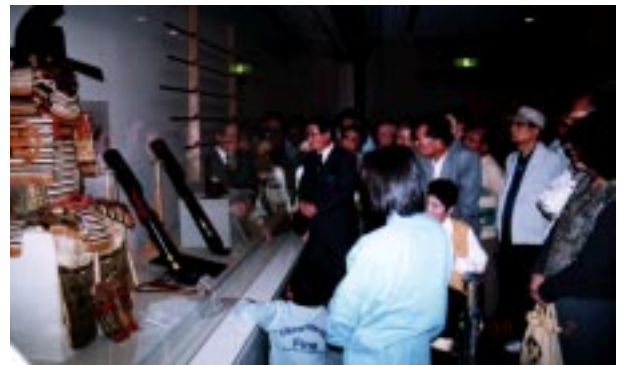
企画展「よみがえる江戸時代絵巻一大名行列一」展示解説

場所：県立博物館企画展示室

日時：5月2日(日) 11:00 ~ 12:00

講師：山川浩實(博物館人文課長)

参加者：15名



展示解説の様子

地びき網

場所：北の脇海水浴場

日時：7月18日(日) 10:00 ~ 13:00

講師：佐藤陽一(博物館主任学芸員)

参加者：60名

当日の朝はあいにくの大雨でしたが、たくさんの方の会員の方が参加されました。雨の中で2網を一齐に引き、驚くほどの魚が採集できました。採集した魚は佐藤主任学芸員が丁寧に説明してくれました。



地びき網の様子

光をつかった昆虫観察

場所：名東郡佐那河内村

日時：7月31日(土) 19:00 ~ 21:00

講師：大原賢二(博物館自然課長)

参加者：30名



説明を受ける参加者



吸虫管(きゅうちゅうかん)で小さなハエをとる

【参加者の声より】

塚井康仁(小学校4年)

ぼくは、さなごうちに博物館友の会の昆虫採集に行きました。

はじめに光で集まってくる虫をつかまえるために青いライトが二つ、ふつうのライトが三つあり、ぼくはほとんどの昆虫がくると思いました。

でも、はじめはガやハチやセミやチョウチョが来ました。ぼくは、なかなかいないオオクワガタやヒラクワガタやノコギリクワガタが来てくれたらいいと思いました。

一時間ぐらいたつとアジアカクワガタが来て、ぼくは一ぴきでほかの人が二ひきとっていました。不思議に感じたのは、足が赤かったことです。ぼくははじめて見ました。

時間がたつにつれて、ほとんどの人が帰りました。でもぼくはさいごまでまわっていると、ヒ

ラクワガタのオスが二ひきとメスが四ひきとれてぼくはすごくラッキーでした。

今日はすごく楽しかったです。

園瀬川釣り大会

場所：園瀬川河口

日時：9月26日(日) 13:00 ~ 16:00

講師：佐藤陽一(博物館主任学芸員)

参加者：9名

台風18号が去り、釣り大会には最高のコンディションでした。

[釣れた魚]タイ科 キビレ・クロダイ,スズキ科 スズキ

[タモ網でとれた魚]メダカ科 メダカ,カダヤシ科 カダヤシ,シマイサキ科 コトヒキ,ハゼ科 マハゼ・アベハゼ・アカオビシマハゼ・チチブ

[目視観察]ボラ科 ボラ類(たぶんボラとセズジボラ),ハゼ科 トビハゼ

釣り大会の結果

第1位 大塚あきと君

第2位 山本優真君

第3位 武市泰典君



スズキ

企画展「伊能忠敬が描いた日本」展示解説

場所：博物館企画展示室

日時：10月3日(日) 11:00 ~ 12:00

講師：平井松午氏(徳島大学教授)

長谷川賢二(博物館主任学芸員)

参加者：14名



展示解説の様子

【事務局から】

新しいコーナーのお知らせ

アワーミュージアム第11号より新コーナーを設けました。「わが町・わが家の宝物」と題して、珍しい写真や懐かしい風景、昔の行事などを紹介します。会員の皆様から心温まる資料や写真をお待ちしています。たくさんのご応募をよろしくお願いいたします。

[応募方法]

年中行事(祭、踊り)、昔の風景(橋、水車、船)などの古い写真や、絵はがきなどがありましたら、事務局宛に解説文(400字程度)をつけてご送付下さい。

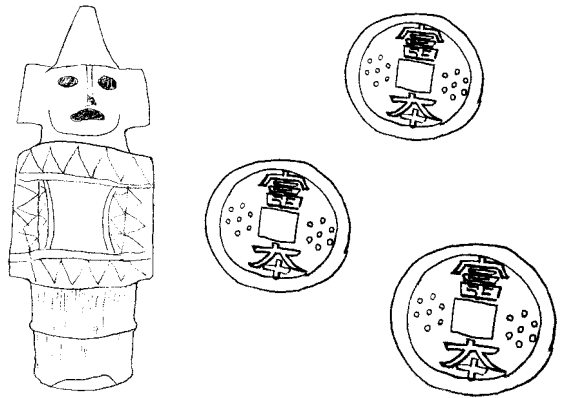
アワーミュージアム既刊号の訂正について

第9号の記事について、著者の方より次の指摘がありました。ご訂正下さい。

増谷正幸「鳥の生息数を調べる」1ページ左13行目「～25 km位が適当です。そこで双眼」
「～2.5 km位が適当です。そこを双眼」に訂正。
1ページ左17行目「生息数に近づけますが、」
「生息数に近づきますが、」に訂正。

今後の友の会行事予定

- ・企画展「発掘された日本列島'99 新発見考古速報展」説明会 11月3日(水)
博物館企画展示室(1階)および部門展示室(2階)
 - ・秋の研修会 11月28日(日)
香川県立歴史博物館などを予定
 - ・友の会バザー&竹でっぽうづくり
12月19日(日)博物館実習室
 - ・草だんごづくり&七草がゆ
1月30日(日)または2月6日(日)博物館実習室
- *詳しくは追ってご案内します。




《友の会のホームページができました》

7月に博物館のホームページがリニューアルしましたが、それにあわせて友の会のホームページも新たにオープンしました。友の会について説明や入会方法、出版物の案内などを掲載しています。また、試験的にアワーミュージアムNo.10もPDF形式で公開しています。友の会を広く知っていただけるページにしたいと考えていますので、アイデアやすてきなイラストがあれば、事務局までお寄せください。

ホームページのアドレス

<http://www.museum.comet.go.jp/tomo/tomo.htm>



こんにちは。徳島県立博物館友の会です。

→友の会で販売している図録など

1. 博物館友の会とはどんな会です。

徳島県立博物館は、私たちのまわりにある自然、人びとの生活や歴史についての展示をしたり、いろいろな行事をおおして、みなさんに自然や文化への関心をもってもらえるようにつとめています。

博物館友の会は、そのような博物館の活動をつうじて、自然と文化に親しむとともに、会員同士が交流しながら勉強したり、楽しんだりすることを目的としています。博物館をみんなのものとして設立するだけでなく、これまで以上に楽しめる場所になるように、いろいろなイベントや楽しいついでをひらいています。ぜひ、ご家族でまた友だちを誘って友の会に入りますね。

2. 入会すると、つぎのような特典があります。

1. 会費証をもって行くと、博物館の施設展示は無料で何回でも見学できます。
2. 友の会の行事である見学会、勉強会に参加することができます。友の会ではバスにのって出かける研修会やあつり、動物の観察会などを行っています。
3. 博物館や友の会の行事のお知らせが、毎月送られるので博物館や文化の最新のことが、はやく確実に分かります。また、年に3回、会報「アワーミュージアム」が送られます。
4. 友の会の出版物やミュージアムショップの品物を割引価格で買うことができます。

徳島県立博物館友の会会報

アワーミュージアム



October
1999
Tokushima
Prefectural
Museum

第11号
1999年10月10日 発行:徳島県立博物館友の会
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館内
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197